

ECEC

巻頭言

子ども時代の成育環境が、後の子どもの発達に影響を与えることは周知の事実です。OECDやユニセフなどの国際機関も、子どもの成育環境の改善に向けた資源の適切な配分が、現在の子どもが主人公である未来の世界をよりよいものとするために最も効率の良い方法であることを認め、世界中で幼児教育（ECEC：Early Childhood Education and Care）の改善に向けた取り組みが始まっています。

チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）は、こうした世界の趨勢の中で、日本の幼児教育の課題は、子どもをめぐる諸課題の中で最も重要なものであると捉え、ECEC研究会を立ち上げ、これまでに3回開催してきました。

第1回ECEC研究会では、日本の保育幼児教育の現状の分析と課題を主題にとりあげました。日本全体の保育幼児教育の実態のマッピングが十分にできていないこと、保育の質の評価とその向上のための方法に課題があることが明らかになりました。

第2回ECEC研究会では、日本の保育の原点である遊びの意味について、世界的な研究が始まっており、そこで提唱されているPlayful Pedagogyについて、理解を深めることができました。また、海外からの研究者も招き、海外と比較することで、日本の課題がより明確になりました。

そして、第3回ECEC研究会では、遊びの質について、研究者だけでなく保育の第一線で活躍している保育士や幼稚園教諭を交え、講演とワークショップを組み合わせて、新たな知見を創成する試みを行いました。

本報告書には、3回ECEC研究会の濃縮された議論と新しい考え方が詰まっています。本書を通じて、保育幼児教育だけでなく、現在の子どもの育ちに関心のある多くの方々と、ECEC研究会の成果を共有することができれば幸いです。

Sakakihara Yoichi

榊原洋一

CRN 所長・お茶の水女子大学大学院教授



ECEC研究活動 への期待

一見真理子

Ichimi Mariko

…………… 国立教育政策研究所国際研究・協力部
総括研究官



大学・大学院では、中国語・比較教育学・教育史を専攻。中国における子ども観、幼児教育・児童研究に関心をもち1年半の北京留学。帰国後、国立教育研究所（現国立教育政策研究所）を拠点として日中教育関係史、アジア地域の教育政策と教育改革、学校と地域社会との連携、東アジアにおける子育て支援と早期教育、学校にもとめられる生涯にわたる資質能力形成等をテーマとする調査研究に参加。そのかわら、職務としてユネスコアジア・太平洋地域教育協力事業、ボランティアとして日中教育研究交流会議等の運営や日中戦争の被害にあった山間僻地への教育支援活動などにも従事。いずれにしても、教育をとおしての持続可能な社会の実現やホリスティックなアプローチに関心がある。

主要業績：『親の学校参加に関する国際比較研究・報告書』（編著）、『近代日本のアジア教育認識（資料篇・中国の部）全22巻』（共編）、『東アジアにおける早期教育の現状と課題・報告書』（編著）、『幼児の生活アンケート報告書：東アジア5都市調査』（共著）、『世界の幼児教育・保育改革と学力』（共編著）、『OECD保育白書』（共編訳）など。

チャイルド・リサーチ・ネットでは「ECEC研究活動」を2013年6月からスタートしており、すでに3回の研究会を開催しています。ECEC*ということばがいよいよ日本でも市民権を獲得するのかと、感慨を深くしております。

ECEC（Early Childhood Education and Care）を「Starting Strong」（人生の始まりこそ力強く！）という標語とともに広め始めたのは、OECD（経済協力開発機構）です。ECECを強化しよう、もっと財政的にサポートしよう、という動きは、OECDが21世紀の幕開けに先立ち、グローバル社会での経済活動（生きて行くための営み）のあり方を、根源からとらえなおす中で生まれました。

ご存じのように、これからの世代は、科学技術の輝かしい成果を享受しながらも、戦争や紛争、経済格差によってもたらされる人口移動、異常気象や自然災害、環境破壊といった問題状況にも勇気をもって取組み、全てと調和的に生きていくことが求められています（日本における2011年の大震災後の試練も、まさにそのことをひしひしと感じさせてくれました）。こうした状況を予見してOECDでも今後の人材育成の焦点をさぐり、獲得すべき知恵や技能の内容を検討したのです。OECDは、生涯学習の必要性を説くUNESCO（国連教育科学文化機関）とともに20世紀末から議論を重ねた結果、キー・コンピテンシー（鍵となる能力）の概念を打ち出しています（2001）。

キー・コンピテンシーとは、人が他者とともに知識技能を相互作用的に活用し、自律的かつ幸福に生きるための能力であり、時代が要請する広義の学力の基礎となるものです。ちなみに国際学力調査としてすっかり定着したOECD・PISAが測定を試みているのも義務教育終了段階における生徒のキー・コンピテンシーの獲得状況です。

OECDは、元来、経済活動の開発を主たる任務とする国際機関ですから、乳幼児期に関しては積極的な政策提言をしておらず、福祉と教育の側面から、UNICEF（国連児童基金）やUNESCOがそのことを主に担ってきました（例えば、国連子どもの権利条約の起草・締結など）。では、この世紀の転換期におけるOECDの乳幼児期重視政策は何に由来していたのでしょうか？ それは、「人生の初期の質の高い教育とケア（ECEC）」の実現こそが、迂遠なようでいて、市民のコンピテンシー獲得ならびに社会の持続的発展にとって効果ある公共財政投資であることが、立証されたからでした**。

この機をつかまえ、乳幼児期にかかわる各国の専門家は、OECDの枠組みを通して国際ネットワークを広げ、調査活動とモニタリングを行い、ECECの充実の必要性を各国政府に訴えかけました***。こうした努力を通じて、政府指導者がECECの重要性を認知したときに、制度も政策も大きく変化しはじめたのです。具体的にいうと、幼保の一元化ないしは一体化（管轄、法制、カリキュラム、職員の養成と資格制度などの諸側面での）、ECECの無償化、0～3歳児のECECサービスの充実整備、乳幼児期と学童期の教育とケアの連携の強化、ECECスタッフの資格・待遇の改善などに関する財政的裏付けのある政策です。

ECECとは、誕生以前から就学前および学童前期までの教育とケアを含みます。その際に大切な点は、できるだけ、「教育とケアを一体的に」、エデュケアとしてとらえようとするところにあります。親の経済的状况にかかわらず、子どもたちが質の高いECECを保障されること、このことは格差社会においてはとりわけ重要です。

ということで、日本で現在進められている子ども・子育てをめぐる制度改革も、世

界的潮流と大きく連動していることがわかります。また世界標準からみてまだまだ欠けている部分も明らかとなってきました。これについては第1回研究会の基調報告（秋田喜代美先生）をぜひご覧ください。

さて、CRNのECEC研究活動では、世界の動きをつかみながら、足元の日々の実践の質や問題点を相互に検討・検証する場が形成されるのだと理解しております。また幼稚園と保育所、この2つの業界の実践家・専門家が、ひとつのテーブルに着き、現場感覚を大切に、ECECの質保証に必要と思われるどんな問題でも自由に協議・検討することも計画されていることを喜びたいと思います。各ECEC現場から、もち寄られるデータや関係者の声や姿から、貴重なエビデンスを構築することも可能でしょう。そして世界的にもユニークな（ある意味ガラパゴス的な？）日本のECECの特質や潜在力を少しでも見える形にして、諸外国の実践家・専門家に発信することもぜひ進めていただきたい活動です。

以上に、大きな期待を寄せたいと思います。

* 国際的には、ECECのほかにUNESCOとその傘下のOMEP（世界幼児教育機構）が使用してきたECCE（Early Childhood Care and Education）や、開発途上国でより多く使われるECD（Early Childhood Development）ということばもあり、いささか悩ましいところですが、「どの用語であれ、子どもたちのウェル・ビーイングと長い目でみた発達を大切にする点では一致している。どれでも差支えない」とイングリッド・ブラムリン世界OMEP総裁（当時）が、2013年7月のOMEP大会で強調しておられたのが印象的でした。

** その最たるものが、ノーベル経済学賞受賞者のヘックマン博士による学説です。

*** その政策提言とモニタリング報告は、Starting Strong: Early Childhood Education and Care (2001)、Starting Strong II: Early Childhood Education and Care II (2006)（邦訳版は星三和子・首藤美香子ほか訳『OECD保育白書』（2011、明石書店））、Starting Strong III: Early Childhood Education and Care (2012)（邦訳版は、同上より近刊予定）にまとめられています。

Contents 目次

	page
はじめに 巻頭言	1
ECEC研究活動への期待	2
第一章 日本における保育の課題と展望	
第1節 日本における保育の課題と展望	6
第2節 パネルディスカッション	
問題提起～日本におけるECECの課題～	11
調査データから見る日本の保育	12
総合討論	15
第二章 遊びと学びの子ども学～ Playful Pedagogy ～	
第1節 Playful Pedagogyとは	
Playful Pedagogy の目指すものは？	22
喜びいっぱい生命感動学	26
子どもの「遊び」をはぐくむ保育者：育ちを見通した「学び」の多様性	30
「遊び」と「教育」の板挟み～幼児の Guided play（誘導的遊び）への理解～	34
第2節 シンポジウム：東アジアの現場	
国定基準からみた台湾の幼稚園における「遊び」の位置づけ	38
「遊び」を通して「学ぶ」～教育神経科学の視点から～	42
「あー、楽しかった！ 明日もまた遊びたい！」という保育を目指して	45
パネルディスカッション 東アジアの現場から	50
第3節 遊びの中に学びがある	
学習の場としての遊び学習：子どもの楽育教具と空間デザイン	53
Playful Learning の情景 All you need is... Love, Passion and Playful Learning	57
第三章 遊びの質を高める保育のあり方（現場の声を聞きながら）	
第1節 遊びの質を高める保育のあり方	62
パネルディスカッション	67
第2節 園種別ワークショップ：「遊びが学びの保育」の実現を阻むもの	73
第3節 現場と専門家の議論：「遊びが学びの保育」の実現に向けて	78
English	
1. The Challenges and Prospects of ECEC in Japan	84
2. Child Science of Play and Learning: Playful Pedagogy	88
3. Child Care that Improves the Quality of Play	92
4. Presenter Profiles	96